

した。

要吉は、その晩、ひさしぶりにいなかの家のことを夢に見ました。ある山国にいる要吉の家のまわりには、少しばかりの水蜜桃の畑がありました。梅雨があけて、桃の実が葉っぱの間に、ぞくぞくとまるい頭をのぞかせるころになると、要吉の家の人々はいっしょになって、そのひとつひとつへ小さな紙袋をかぶせるのでした。要吉の家では、その桃を、問屋や、かんづめ工場などに売ったお金で一年中の暮しをたてていたのです。夏の盛りになると、紙袋の中で、水蜜桃は、ほんのりと紅く色づいてきます。要吉たちは、それをまた、ひとつひとつ、まるで、宝玉でもあるかのようにな、ていねいに、ソツともぎとるのでした。ですから、自分の家の桃だといっても、要吉たちの口にはいるのは、虫がついておっこったのや、形が悪いので問屋の人にはねのけられたのや、そういうた、ほんのわずかのものでした。

要吉は、ある年、近所へ避暑にきていた大学生たちが、自分の家のえんがわへ腰をかけて、一粒よりの水蜜桃をむしやむしやと、まるで馬が道ばたの草をでもたべるようにたべちらすのを見た時のうらやましい驚きをいつまでも忘れることができませんでした。

——あんなに大事にしてそだてあげた水蜜桃も、こうした東京の店へくれば、まるで半分は、函づみのままにくさって行くのだ。

要吉はくやしさに思わず、太ったおかみさんのからだをむこうへつきとばした夢を見て目をさました。

——

と思うと、今度は、やぶの中へすててきた、ネイブルだの、バナナだの、パイナップルだのが、ひとつひとつ、びよんびよんとび上って、要吉の胸の上で、わけのわからないダンスをはじめました。そうすると、いつのまにか、いなかのおとうさんや妹たちの顔が、それをとりまいてめずらしそうに見物しています。

——ほんとうに、家の人たちは、まだバナナさえも見たことがないのだ。要吉は、夢の中で、そういういながら、ごろんとひとつ寝がえりをうつと、昼間のつかれで、今度は夢もなんにも見ない深い眠りにおちて行きました。

三

朝のうちに、店の仕事がかたづく、要吉は、自転車にのって、方々の家へ御用聞きにでかけなければなりません。それはたいがい、大きな門がまえのお邸ばかりでした。

勝手口へは、どこの家でも、たいがい女中さんがでくるのでした。

「それではね、いちごを二箱と、それからなにかめずらしいものがあつたら、いつもくらいずつ、届けてくださいな。」

そういったおおような注文をする家が多かったです。要吉は、それをひとつひとつ小さな手帳